

## '89 草地農業現地検討会（野幌）報告

—案内・経過・会計—

事務局

### 経過報告 —事務局の記録から—

9月29日（金）、貸し切りバスは札幌駅（北口）前を定刻よりやや遅れて雨天のなか出発、酪農学園大学（野幌）を経由して江別市角山へ向かった。参加者乗員合わせて約40名のほど好いセミナーツアーとなった。

車中、原田会長から「……………この現地検討会は、酪農・畜産をとりまく内外の厳しい環境のなかで、営農現場からの報告を中心としての昨年のシンポジウム“国際化時代における日本型草地酪農の構築”につづくもので、さらにこのあと12月の大会のシンポジウムには“国際化時代における日本型草地酪農構築”のパートⅡとして“研究サイドからの提言”を評議委員会で決めていただいております、私は今日の現地検討会を含めたこれらを3点セットと考えております。最後まで、参加の皆さんとご一緒に勉強していきたいと思っております。……………」という挨拶があり、参加者のなかから「……………、先生方の研究発表会やシンポジウムも大事だと思いますが、われわれ現場の会員にとっては現地検討会での具体的な交流があって、埒り多いものになると思っていますので宜しく……………」、また研究者から「道央の酪農家を見るのははじめて……………」などの声も聴かれた。

### —棚橋牧場—

角山では、棚橋牧場（総面積20ha、経産牛29～30頭、育成牛30頭、年間乳量275t、乳検牛群1頭当たり8,591kg）を見学、経営主の棚橋輝雄氏から経営概要の説明を受け、とくに「泥炭草地の改良、アルファルファと高泌乳牛」について討論した。そのなかで「かつて“適地適作でやるべきで、泥炭地にアルファルファを作ろうなんて無理だ、やめたほうが良い、無茶な……………」と言われましたが、ここではアルファルファを作らなければ良い牛は飼えません。また地価が高いので、それに見合う高品質の粗飼料を自給したい。購入飼料のTDNは安価だがCPは高価である。アルファルファは窒素肥料を儉約できる。」などが明らかにされた。そして13産目を孕んでいるという名牛を見学した後、作土（客土）の浅い泥炭草地で良好な生育をみせるアルファルファ草地に向かい、そこでは経営者の草作りへの情熱とアルファルファへの期待の大きいことを感じた。

### —町村農場—

雨のぱらつくなか、江別市対雁に向かい、町村農場（総面積180haのうち農用地129ha、経産牛105～110頭、育成牛95頭、年間搾乳量814t、乳検牛群1頭当たり7,566kg、（詳細は北海道草地研究会報№23特別号1989参照）を見学。酪農場景観の理想というか、酪農哲学、酪農のロマンを感じさせる場内の光景をバックにして、経営主の町村末吉氏から農場施設の歴史と用途、その長短などをまじえて「酪農経営のポイント……………」をうかがった。そのなかで「酪農経営のポイントは、土作り、草作り、牛作りの基本を守るということですが、同時に経営と経済はいつも一体でありますから施設や機械を無駄のないように大事に有効に使い、かつ同一経営内で生産物の付加価値を高めてから販売しています。牛群1頭当たりの年間乳量はおよそ7800kg程度、乳脂率4%以上で、農場の日乳量は2000～2500kg、

そのうち最低2000kgは市乳に加工して販売、多い分はバターに加工して販売し、脱脂乳の一部は北海道酪農公社へ……」と語られた。また古い牛舎施設や機械も新しい物と併せて合理的に大事に使っている現場、場内の市乳施設、洪積重粘台地で良好な生育をみせるアルファルファ混播草地に関心が集った。

#### －石狩川－

正午ごろ、江別市役所の畜産係の星さんらに案内されて石狩川のスーパー堤防に向かい、雨あがりの日差しの中かで昼食（弁当）をとった。そのとき事務局の一人が「ここから夏は川面にヨットが浮かび、手前の河川敷には草を食む牛の群がみられます。そのとき、この雄大景観、この特殊な空間に興味を持ちました。そこで、畜産係りに無理を言って案内してもらいました」と解説。その後、「石狩川河川敷の草地利用と乳肉牛の育成」をテーマとしてスーパー堤防の草地・河川敷の放牧地を見学した。そのなかで利用者から「河川敷・スーパー堤防の本来の機能と草地利用・景観の保全をどのように調和させるか。とくに河川本来の機能を保全しつつ飼料として質の高い草を得る方法はないか……」などの要望が出された。

#### －河野牧場－

その後天候は良くなり、江別市篠津の河川沖積土壌に位置する河野牧場（総面積29ha、経産牛32頭、年間出荷乳量244t、乳検牛群1頭当たり8618kg）を見学。経営主の河野崇治氏から牧場の経営概要と将来にける抱負を聞いた。そのなかで「耕地規模を拡大したいが地価が高くて……」との声。事務局の設定した課題「酪農経営に何を望むか」に即答はなかったが、「情報過多の中かで基本を失わず牛に無理をかけないで経営効率を上げていきたい……」という情熱的な語りから、参加者たちは中堅酪農家の未来像を感ぜずにはいられなかった。そして古いアルファルファ混播草地の沖積土壌を見学し、「これが理想土壌か」との声があがった。

#### －雪印種苗技術研究所－

その後、江別市西野幌の雪印種苗技術研究所に向かい、ハイテク施設の見学を通じて技術戦略をうかがった。

#### －細田牧場－

午後3時過ぎ、恵庭市駒場の火山性粗粒土壌に位置する細田牧場（総面積66ha、経産牛82頭、未經産および育成牛53頭、年間乳量587t、乳検牛群1頭当たり7935kg）を見学。経営主の細田治憲氏から経営の概要と沿革、火山性粗粒土壌での土つくりの苦勞、なかでも販売作物を組み込んだローテーション草地でし好性の良いことや牛作りでは母系を大事にしてきた理由、また急速に変化してきた社会のながれのなかで酪農は経営の面でも人間生活の面でも変革を迫られていることなどについて実感を込めて語られた。そして事務局の設定した課題「21世紀に向かう酪農家の課題」に関連して「……高泌乳牛を追求して一腹搾りの経営に向かうことも考えられるが、しかし、乳は粗飼料で搾るのが基本である。低乳価、高賃金、週休2日など時代の変化に対応するためフリーストールとミルクングパーラーで省力化を計り、これに肉牛を加え、さらに販売作物も加えてローテーションによる土作りを進め、また牛作りではこれからも母系を大事にしていきたい。」と語られた。このほか「粗飼料は単位面積当たりの収量もさることながら、し好性の良い食い込める草が欲しい。」という注文もあった。

#### －懇親－

夕陽の落ちる頃、バスは千歳市のキリンビール工場に着いた。この時点で朝の出発時は荒天であったに

もかかわらず参加者数が計画安全数を越えたことと大きなトラブルがなかったため、会計にゆとりができたということになった。そこで「別途各自負担という案内の記載を変更して参加者全員のジンギスカンパーティーとなり、機は熱してもはや事務局の設定した課題「……草地農業の未来を考えてみよう」の議論になったかどうかは定かでない。しかし、酔っ払いも出ず、紳士たちはそれぞれ有意義な懇親のときを過ごした。

この後は自由下車解散とし、バスはJR千歳空港駅、JR札幌駅（北口）経由で酪農学園大学（野幌）に向かった。参加者たちは「こんな検討会をまたやってください。お世話になった農家や企業・役所の皆さんに宜しく言ってください。ありがとうございました。」の声を掛け合い別れていった。

#### — 総括 —

最後に、今回の検討会では上記の外いずれの牧場でも技術に関する議論が大いに展開され、その詳細な記録は事務局の用意した資料「'89草地農業現地検討会ノート（野幌）」に各自書き留めたことであろう。しかし今回の検討会で、各自の専門を超えて特筆すべきは、酪農・畜産をとりまく厳しい環境のなかで希望をもって進もうとしている酪農家の情熱にふれ、われわれ参加者たちは励まされる思いではなかったか。と偏見の強い事務局の一人は総括している。

以上、現地検討会を無事終え、改めてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

事務局（文責：篠原）

## 会 計 報 告

会 計 小 阪 進 一

日 時 : 平成元年（1989年）9月29日 8:00～20:00

参加者数 : 39名

参加費 : 10,000円（当日受付）

### 収 入 の 部

参加費 390,000円 39名×10,000円

### 支 出 の 部

1. 見学先謝礼代	24,120	ビール券 1ダース×6ヶ所
2. 清涼飲料代	4,697	
3. 昼食弁当代	42,000	42名×1,000円
4. 夕食代	90,042	
5. 高速道路代	1,950	
6. バス代	160,412	振込手数料 412円
7. フィルム代	667	
8. 写真現像代	3,739	
9. 資料コピー代	12,500	
10. 予備調査資料費	7,500	
11. 公民館使用料	4,000	雨天の場合使用

12. 写 真 代 他	1,792
13. 大会懇親会補助	10,850
合 計	364,269円

収 支 差 額

390,000円－364,269円＝25,731円

25,731円は、平成元年度北海道草地研究会一般会計の雑収入として振込むことにした。